

■ 南山大学 人間関係研究センター 公開講演会

## “みんながつくるみんなの学校”

—すべての子どもの居場所を地域の学校に—

日時：2017年12月16日（土）13:00～14:45

場所：南山大学名古屋キャンパス D棟地下1階DB1教室

講師：木村泰子さん  
(元大空小学校校長)

---

### 司会（石田）：

皆さん、こんにちは。南山大学の石田と申します。寒い中、たくさんお越しいただきましてありがとうございます。

皆さん、NHKの「ラジオ深夜便」ってご存じですか。私、夜中に目が覚めると、無理に寝ようとしなくて枕元のラジオをつけるようにしているんですが、時々、きらりと光る宝物に出会うことがあります。5時から「明日へのことば」というコーナーがあるんですが、おそらく木村先生の話聞いていたのがそのときで、すぐにメモして本を買って読ませていただいて、それから、ネットで上映会を調べて、この近くでもあったんですが、なかなかスケジュールが合わなくて、私は静岡県の湖西市の上映会に行ってきました。そのことをいろんな人に言ったら、「ぜひ南山大学に呼んでほしい」という話になりまして、1年たってその願いがかなうことになりました。

組織の中で、いろんな対立や葛藤というのは必ず起こるもので、関わりが密接になればなるほど、そういう対立だとか問題だとかが起こってきます。そのときに、誰か担当者だとか、上司に何とかしてよと頼むのが普通だと思うんです。それをみんなで知恵を出し合って解決していく組織が理想なんですが、なかなかそういう組織になることは難しいと思います。そういうすばらしい学校をつくり上げてくださった木村泰子先生のお話を、今日はこれからお聞きしたいと思います。

もう皆様、既にご経歴等に関してはご承知と申しますし、今日のチラシにも載っておりますのであえてご紹介はいたしませんけれども、この後、もう、このままいいですか？ それでは、木村先生にご登壇いただきます。よろしくお願ひいたします。

木村：

(フロアから拍手) すみません、ありがとうございます。

皆さん、こんにちは。(フロアから「こんにちは」) わーっ、何か。すごいあったかい空気ですね。もう、勝手に顔が笑ってしまうというか、あっ、子どももこんな感じなのかな。今、後ろから入ってこさせていただいて、入ってきたらよう黙ってへんから勝手にこんにちはとか、紹介もされてへんのにこんにちはとか、挨拶をしたら皆さん拍手をしていただいて、前へ立たせていただいたら、皆さんの見ていただく目がとってもあったかいんですよ。子どもって、子どもというか、人って、言葉とかじゃなくて、人と人が向き合っているときに、そこに何か見えないとってもあったかい空気、この空気があればどんな子ども、「よっしゃ、俺って大事やから頑張ろう」って、何かそんなふうに思うんやろうなっていう、大空の子どもたちがいつも耳にしていたことを、今、私は自分の体の中で、皆さん方のこの空気を感じさせていただいて、蘇ってきました。

今日、子どもたちもいて。最近、子どもに飢えているんです。大人の人たちとはいっぱい学ばせていただいているんですが、最近是这样やって子どもたちに出会えると、それだけで、ああ、子どもや！とか、わくわくしてくるんですね。ありがとう。

自己紹介をしないとイケないんですが、まあ、全て映画でばれていると思います。私は大阪市で、二十歳のときから、短大を卒業して教員をしてきました。もともとね、私は、中学校の体育の教師になりたかったんです。だから、中学の体育の先生になるためだけの勉強みたいなのを、あんまりですが、ちょっとやっていた。二十歳で短大を卒業して、採用試験を受けた。中学校の体育の教師の採用試験を受けて、合格しました。でも、合格しても口がなかったんです。きっとそれはね、そんなに女子の体育が要らなかった時代。その当時、やっぱり4年生から順番に採っていくんですね。そうやってきたら、短大まで回ってこない。ほんとうはテストをした成績が低かったんやと思いますよ。思うんですが、自分の中では勝手にそうやって言い訳をつくっているんですけど。2年間、実は水泳をやっていたので、もう合宿、合宿、合宿、選手生活の2年間で終わっているんですね。だから、何ひとつ、『小学校』の『し』の勉強もしていないのに、二十歳で、突然「あなたは今日からここの小学校です」って言われて。そこで出会ったのは、3年生の40人ぐらいいた子どもたちなんですね。

この、二十歳のときに出会った3年生の子どもたち、この子どもたちが今、54、55のおっちゃん、おばちゃんになっています。一番最初にね、深夜か何かにテレビ版のドキュメントが流れた。それを、この当時の3年生の誰かが見た。その頃、名前を呼ばれたことなく、みんな私のことを「ばんばん、ばんばん」っ

て呼んでいたんですね。何でばんばんと思う？

フロア：わからん。

木村：優しいな。ほんとう？ えっ？

フロア：わからん。

木村：わからん？ いや、優しいわ。もうほんとう、優しいな。ばんばんって、何となくイメージ。

フロア：ばんばんしゃべるから。

木村：あっ、まだちょっと救われました。

フロア：ばんばんたたく。

木村：

あっ、ばんばんたたく。いや、もう、ようそんな、ほんまに言いますね。今日は教育長さんたちもいらっしゃっているので、今さら首にはならない。

ばんばんというあだ名を、子どもがつけていたんですね。私の理由は、その当時、『チキ・チキ・バン・バン』って映画がはやっていて、あっ、この映画のばんばんやって私は思っていたんですが、子どもたちは全員「そうではない」って言っていたんですね。

この五十幾つの子どもたちが、映画でばんばんが生きているってわかったそうです。この映画が公開されたのは、ちょうど3年前なんですね。ドキュメントに出てきているAとかBとか、「ごめんね」って言いに来た相手を殴ったマスクのCとか、あの子たちが6年生になって卒業するほんの少し前、2月の下旬に初めて大阪のちっちゃい映画館で公開されたいんです。

映画は、大空の7年目やったんですが、もうね、7年目の自分たちの事実が映されているものであって、8年目になると、あれは過去なんですね。だから、自分たちの事実を自分たちが振り返って、大空のみんなはあの映画でとても大きな学びを得たんです。でも、8年目からは過去なので、ただの一度も学校では話題に上がらないんです。「映画」の「え」も話題に上がらない。地域もそうです。だって、もう進化しているわけですからね。

二十歳のときの初めて出会った、もう、こんなのは犯罪に近いと思いませんか。小学校の勉強もしていない二十歳の女の子が突然、はい、先生やというわけですからね。今から考えたら犯罪に近いなと私自身は思うんですけど、その

1年間、3年生を持たせていただいたんですが、4年生を持てなかったんです。理由わかります？　どうぞ。どなたでも。普通、3年、4年と持ち上がりだったんですね。私以外は全員持ち上がってはったんですが、私だけが3年生から4年生に持ち上がれなかった。

フロア：学級崩壊。

木村：

学級崩壊。残念ながら、ブーッなんですね。学級崩壊で持ち上がれなかったら、まだ、もうちょっと自分の中では、あっ、かわいそうやったと思えるんですけどね。わかりません、皆さん？

私は、この1年目の子どもたちの出会いが、その後の自分の小学校の中で子どもと向き合う原点になっているなって思っているんです。実際何の勉強もしていないこの私なんですけど、実は、私が行っていた短大はとてもマンモス大学だったので、夏休みに、集中講義を受ければ小学校の免許も取れるという特別な制度があったんですね。私は、夏休みは合宿で一日も出られない。ということは、お金を払って、資格は取っておくほうがいいという友達がね。私は要らなかった。自分の中で小学校の教員になりたいという願望は全くなかったんですね。その理由は、自分は小学校で、何か、信頼できない人にたくさん出会った。先生が子どもをいじめるんやって、そんなふうに思った、とても残念な小学校生活をきっと私は送ったんだろうと思うんですが。だから、小学校の先生になりたいなんて思いもしなかったんですね。で、実はね、友達が「はい」「はい」とか言って、とってくれたわけです。子どもたちがいますね...。まあ、こんなものや。ところが、教育実習だけはそうはいかない。本人が行かなあかんでしょう。この教育実習が、2週間やったんです。

何で、私は今、こんな話をみんなにしているのかなって思うんですが、大体常に原稿を考えないのが大空なんです。出会った人と向き合ったときに、自分から自分らしく自分の言葉で語る、このことを全ての子ども、全ての大人が大事にしていたので。私はきっと皆さん方のあったかい空気に、何か自分がしゃべりたいことを、そんなばらさんでええことをばらしている自分があると思ったんですが。実は、この教育実習で私自身が学んだこと。これが今の時代に一番必要やって私は思うので、ぜひこの1つのことだけは伝えたいなって、今、とても強く思います。

それはね、教育実習で尼崎のある小学校に行き、5年生の教室に入ったんですね、Dという男性の先生の。私はそのとき二十歳でしたから、正確に言うと3月生まれなので19歳ですね。19歳だったので、何か40ぐらいのおじさんに見えました。ほんとうの年齢はわかりません。その人が私の指導教官だったんですが、2週間、何ひとつ教えてくれませんでした。その先生と子どもたちが授

業をする、ただそこにいるだけの人間で、居場所がなかったんですね。子どもたちも、別に「教育実習の先生」って声をかけることもなく、「あっ、そこで一緒に勉強しい」みたいな、こんな空気やったんですね。

その前に2週間、中学校の教育実習に行きました。そこはね、もうチョウよ花よと。コスギという名前やったんですけど、「コスギ先生、来てよ、コスギ先生」とか言って、「わあ、私はとってもみんなに好かれて大事にされてる」みたいな、鼻が天を向いているぐらい気分のいい2週間。その後の、「あっ、ここにいてるの、たまたまあんたもここで1人頑張りな、勉強しいや」という、この現実、私自身が全く謙虚に学ぶ1人の人、という自分を失っていたと思います。何でもてはやしてくれへんとか、何で大事にしてくれへんとか、子どもたちも何ひとつ声をかけへんやんって。

実は、この状況がね。大空の7年目、この映画をつくった1年間カメラが入ったときです。カメラマンのEがね、最初の1週間ぐらい、顔が曇っているんですね。彼がぼつと私に、「自尊心が何かめっちゃくちゃ低くなりました」って言うたんですね。「どうして」って言うと、始業式を撮りに行ったり、他の小学校や中学校によく入りに行く、入りに行ったら、必ずそこでみんなが、「わーっ、カメラや！カメラマン！テレビ局！」って、自分が有名人のような注目されていい気分になっていた。大空に行ったら誰ひとり、「カメラや、カメラマンや」なんて、自分に対して全く反応を示してくれない。だから、「とても寂しいな。自分の自尊心がどこにもない」って、彼はそう言いました。それぐらい7年目の大空は、カメラが入ろうと違う人が来ようと、「あっ、そうなの」って、「それがどうしたの」って、こんな学校やったんですね。これを言いかえたら、開校から7年目の大空は、学校というスーツケースのがんにした箱物ではなくて、学校という名の地域社会やったんです。だから、例えば、学校の中にコンビニができたり、学校の中に郵便局ができて、何の違和感も持たない。そんな子どもや大人が学んでいる場所やったということなんですね。

この教育実習の先生が、2週間、私には何ひとつ教えてくれなかったんです。「研究授業をせなあかんから指導案の書き方、指導案をつくるのを教えてください」って言うと、その先生は、「ああ、無理だよ」の一言やったんですね。周りの実習生はいつも放課後、いっぱい教えてもらっている。この先生は教えてくれない。そうなったら、自分自身の考えは、「この先生がアウトや」って。周りの先生いい先生、この先生は意地悪。何よ意地悪おじさん！ってずっと思っていましたから。

そんなふうに2週間、私は何ひとつその先生から教えてもらうことがなかった。なので、大学ノートに、先生が入ってくる、先生がしゃべった言葉、子どもた

ちがしゃべった言葉、動き、毎日の授業記録を書くこと以外、自分の居場所がなかったんです。だから、ずーっと授業記録を2週間分書くことで、自分を落ちつかせていた。ところが、突然小学校に行くとなったときに、私のバイブルがその大学ノートやったんですね。その先生がやっていた授業、子どもたちの反応、それが全部、全ての教科がそこにあるので、何の指導も受けていない私は、そのノートを見ながら、ずっと授業を進めていた。

普通ね、教育実習で1日のことを書けば、指導教官に出して、指導教官はそこに何か書いてくれたりハンコを押してくれたりするんです。2週間、最後の日も、毎日ノートを出すんですが、一字も書いてくれていない。ハンコの一つも押していない。こういう指導教官を皆さん、どう思います？ 私はね、「最悪」って思っていました。最悪と思う私は、学ぶ心なんてどこにもなかったですね。教えてくれへんやんかって、相手のせいにしていただけの自分やったので、もし先生が教えてくれていたら、教えてもらったことはどこから出ていっているでしょう。その大学ノートはきつとつくっていなかったと思います。その大学ノートがあったから、1年目に、おそらく授業ができた。

ところがね、3年生を持った4月の第1回の学習参観日、おうちの人が後ろへぶわーっと並ぶわけですね。子どもとはね、二十歳と10歳ぐらいって、もう兄弟みたいなものでしょう。すごい楽しい授業を、子どもがどう思っていたかは子どもに聞かなあかんのですけど、私はすごい楽しかったんですね。みんな、きゃーと笑いながら楽しい授業をしている。だって、教育実習で見た授業をしているわけですから、子どもたちは楽しいですよ。生き生き動いていますよ。

ところが、後ろにいてるお母ちゃんたちの顔は、みんな怒っているんです。めっちゃ怖かったです。そんな半端な怒り方じゃなく、すごい怒っているんですね。私は、親ってこんな怖い顔をして授業を見るのかって、そう思っていました。チャイムが鳴った途端、誰ひとり残らず親はさーっと消えました。どこへ行っただかという、校長室に行かれました。校長室に、「あの先生をすぐに首にしてください」って言いに行かれたんですね。当然やったかもわかりません。

皆さん、これ、1970年代です。1970年の日本社会が求めているニーズ。日本社会が求めているニーズは、どれだけ正解をたくさん覚えて、どれだけいい点数をとって、どれだけいい学校に行って、どれだけいい就職を見つけるか。追いつけ、追い越せの時代やったんですね。だから、社会のニーズがそうだったので、小学校現場で先生の使命なんていうのは、文科省もそうです、どれだけ知識を、どれだけ正解を子どもたちに、嫌な言い方をすれば、植えつけるかなんですね。正解の数が多ければ多いほど、必ず大人になったら幸せになる。これが1970年代だったんですね。

この1970年代に、実はこのDという先生は…。実習が終わって最後の日に、その学校の教頭先生に私だけ呼ばれたんです。耳元でね、「あんたは世界一幸せな教育実習生や」っておっしゃったんです。私は、はあっ？と思いました。

その後おっしゃったことは、「あんたが教えてもらっていた先生は、教育の神さんなんやで」と。私はそれを聞いても、ここの学校は教頭先生も変！と思いました。そのまま実習が終わったんですね。

ところが、1970年代にこのDという先生がやっておられた授業、この授業はね。実は2020年、オリンピックが始まる年に、文科省は小学校、中学校の授業を大きく変えなあかんという指針をもう出しています。その目玉を言うと、小学校の45分の授業の目的は、知識や正解を教えることではないんやで、と文科省が言い切っているんですね。そうではなくて、主体的、対話的、深い学びを子どもたちが獲得する、こういう授業を先生たちはやりや、ということを見える形で出しているんですね。

主体的というのは、先生がではないんですよ。先生がいい授業をする、先生がいいことを教えてやっている、先生が努力している、先生がいっぱい勉強して、先生がこんないい授業をしている、ではなくて。子どもが、45分の授業の中に、自分が、先生に教えてもらうんじゃなくて自分がどれだけ獲得しているか、自分が友達とどれだけ考えを持って、どうやって伝え合って、どうやってチャレンジして、友達をどれだけ大事にして。『自分が』って言うのが主体的なんですね。

次の対話的というのはね、自分以外の他者、要するに、この中であれば自分の隣にいる人、自分の後ろにいる人、今日はいろんな立場の方が来ていただいているから最高の学びの場やと思うんですね。色とりどり、多様な空気がある。こんな恵まれたこの場で自分以外の他者と、小学校で言えば、自分の周りの友達もあるでしょう。そこに、地域の人たちが常に授業の中に入っていたら、自分と全然違う大人たち、友達の母ちゃんが「ちょっとここの教室で自分も勉強したいわ」と入ってきたら友達の母ちゃんがそこにいるし、外部の人がいてるし、そんな自分と違う人、その人と、授業の中でどれだけ対話をするかなんですね。

司会の先生がおっしゃっていたんですが、対話は絶対けんかにならないんです。対話は、人と人の意見の違うものでも、必ず接点が見つかる。これが対話なんですよ。授業の中で対話をしていたら、ひとりぼっちでは絶対できない。ひとりぼっちではできひんし、授業の中で対話が成立したら誰ひとり敵と味方に分けない。これが、対話的なんですね。

もう一つ、深い学び。小学校の6年間でいっぱい自分の体の中にため込んだ力は、今使うためじゃないんですよ。この子たちが10年、15年、20年たって社会に出たときに、小学校の6年間の学びをどれだけ使えるか。10年先に生きて働く力、これが深い学びなんですね。

これを、2020年から全国の小学校で、「よし、やろう」ってやるんです。実は、この授業をD先生は、1970年代の、あの「右向け右」、「何であんたは左を向くの、

右、言うたらこっちでしょう」、「私、左ききやねん」、「勝手なことを言うたら  
いけません、右です」って、この時代にされていたということなんですね。す  
ごいと思いませんか。私はこの先生に出会っていなかったら、おそらく今の自  
分は考えられない。きっと「右向け右」とか言って、私の言うことを全部子ど  
もが聞くのが当たり前、例えば子どもたちに、「はい、ついておいで」って言っ  
たら、先生がついておいでと言うからついていく子どもたちをつくっていたと  
思います。でも、先生が「ついておいで」って言ったときに、「えっ、どこへ  
行くの?」、「何しに行くの?」、「何で行くの?」、そうやって言う子どもって、  
案外、今、邪魔なことはありません? おうちではどうですか。「お母さんの  
言うことを聞きなさい」、「お父さんの言うことを聞きなさい」とか言っていま  
せん? 面倒くさなったら言うでしょう? 余裕のあるときは、「あなたはど  
う」とか言うんですね。余裕がないと、もうええねんって、黙っておいでと  
かね。これが大人の勝手って、子どもはみんな受容しているんですね。子ども  
のほうが風呂敷ですから。大人になればなるほどスーツケースに変わっていく  
んですね。

大空で、新しく集まった教職員と最初にしゃべったのは、「なあなあ、勘違  
いせんとか。私らの仕事が、目の前にいる子どもたちを育てることやと思っ  
ていたら、これは1970年代やで。今の時代、実は今から12年前なんですけどね、  
今から10年先の社会を想像していこ、と。子どもたちは10年先の社会に出るわ  
けですから、10年先の社会のニーズ。だって子どもたちは、その社会で求め  
られているニーズの中でね、なりたい自分になっていくわけですよ。そうなっ  
たらね、今自分の持っている価値観だけで教えて、教えて、言うことを聞きな  
さいって言って、10年先「木村の言うことを聞きって言うたけど、10年先に何  
ひとつ通用せえへんやん」って、こういう時代は100%来ると思います。だって、  
例えば勉強を教える、知識を教える、1足す1は2、この正解を教える、この  
仕事かもし先生たちの仕事やなんて思っていたら、10年先は誰かにとられるで  
しょう。人工知能にとられます。何か小説まで、人工知能がつくった小説が準  
優勝か何かになったって、そういうニュースも聞いています。だから、10年先  
の社会に子どもたちが出て、そこで、この子たちが小学校6年間で獲得した力  
を、その社会のニーズに合わせて存分に使える、そのための学びが6年間ある  
わけですよ。私は、こういうことを1970年代に、実は、体で教えてもらった  
んですね。

まだいまだに、二十歳のとき校長先生に言われた言葉が残っているんですよ。  
「お母ちゃんたちが一番怒っている理由はな、先生が1時間の中で答えを1個  
しか教えてくれへんかったことや。1個しか覚えられへんで、周りは5個覚え  
たら、答えの数が少なくなったうちの子がかわいそうやと。」これが理由やっ  
たそうなんですね。だから、正解を覚えるという営みですね。でも、このD先

生がやっておられた授業では、子どもがみずから獲得するんですね。子どもが子ども同士。どんな授業やったかという、先生がぱっと教室へ入ってくるじゃないですか。黒板にね、課題をびゅーっと書くんです。課題を書いたら、「どうぞ」って言うだけなんですよ。「どうぞ」って言われたら、うわーって話して、何とかかんとか、立ち歩いて、ここのグループはどうとか、うわーっ、やるんです。その次にDさんが、「そろそろいいか」と言うんですね。そろそろいいかとか言うたら、みんな、ぱっと意見を言い出すんです。「じゃ、まとめようか」。3言なんです。どう思う、そんな授業？

フロア：考えられない。

木村：

考えられへん？ いやーん、担任の先生が聞いたらショックやで。それだけ先生たちが教える授業なんですよ。

これは、否定しているんじゃないくて、皆さん、木村がこう言うていたからいっぱいしゃべっている先生はだめって思わないでください。やっぱりそれぞれのベースがあります。私は1970年にそれしか知らなかったんですから。これが幸せなのか不幸なのかはそれぞれお考えいただくことなんです、これしか知らなかった。それで教員になって、子どもたちはめっちゃ育つんです。私が育ててないから。育てるという仕事で満足していたら、子どもが育っているという事実が見られないんですね。でも、育てるという行為を、目の前の子どもを信じることに変えたら、子どもが育つ事実がいっぱい見えて、その事実から、自分がとても大きく学べるんですね。次々次々ってステップが上がっていく。子どもの事実が見えているから、私が決めるステップじゃなくて。だから、授業が楽しいのは当たり前なんですね。

で、この校長先生はとても困られて、3年から4年の担任に行くはずが、あんたは次5年って。首にはされへんかったんですけれども、5年生になりました。

これが自分のスタートやったんですけど、要するに、教える、教える、教えるという、大人の言うことを子どもが聞きというこのスタイルは、子どもたちの世界に入ったら、強い子の言うことを弱いやつは聞けよ！という繰り返しになるんですよ。だって、子どもは大人を見ているから。殴られて育った子は、必ず殴るんですね。あ、必ず殴るって断定的に言うのは、とても子どもに失礼ですね。

例えば、映画の中に出てたB。彼は今、中学3年生になっているんですね。母から手紙が来てね、「校長先生に今のBを見せたい、まぶしいくらい輝いている」って書いてありました。母ちゃんは、若いころにBを産んでいるので、

どうやって言うことを聞かせばいいか難しかった。だから、言うことを聞けへん子どもに言うことを聞かそうとすると、ぶわーっと怒って、これは子どもからしたら暴言、怒って暴言を吐かれてもやめへんかったら、次、殴る。殴られたら泣く、泣いてやめる。これの繰り返しやったんですね。Bは、一番身近にいる大人が困ったら、いつも自分が殴られていた。そうすると、Bは人を殴りたいと思っているわけじゃなくて、自分が困ったら気がついたら殴っているんです。

あいつは卒業する前に、「なあなあ、校長先生、俺より暴力、暴言を吐いたやつって今までおった」って言うから、私は、「おらん」と言うたら、「これからおるかな」って言うから、「まあ、おらんやろう」って。「そうか、俺は一番か、ナンバーワンの座はずっと1位やな」と言うから、「誰にも越されへんと思うよ」って。こう言って卒業しているんですね。

でも、このBのことを、今のBが輝いているからいっぱい言いたいと思うんですけど、その母の手紙にね、Bは中学3年生になって、「俺、夢ができた」って言ったそうです。このBって、みんなが夢を語っているときに、「大体夢なんて語る大人は、だから生っちゃろい」って言うていたんですね。夢が実現するなんて思っているのかとか言ってね。私らが、「いや、夢は実現するものよ」なんて横から言うと、「だから大人は」とか言うて向こうに行くBやったんですけど、中学校3年生になって、「夢ができた、俺の夢は教師になることや」言ったそうなんですね。あいつ、私に、「教師なんかこの世の中から消え去れよ」ってよう言うてあったんですね。「教師がおるから」とか、私の顔を見て、「校長の顔も見たくない、消えろ、くそばば」とかよう言うていたんですね。でも、このBが教師になるって言った。それで、母は驚いて、まあ、うれしかったんでしょうね、手紙を送ってきました。

その手紙に書かれていたのは、母もおもしろい母ちゃんやから、Bが教師になると言うた途端に、「あんたな、それは無理」って言うたんですって。「最近の子どもはすぐキレるで、あんたみたいに。子どもがすぐキレて、あんたが先生になってあんたもすぐキレて、子どもも先生もすぐキレていたら、その学校はたまったものやないで」って。そう言ったら、今までやったら、「そんなのをママが言うから何とか」って言うBやったのに、何ひとつママが言うことを止めないで、「うん、だから俺はなる」って落ちついて言ったそうです。「すぐキレるやつは気持ちちは誰よりも俺がわかる。だから、そういうやつが多ったら多なったほど、そいつらの気持ちちのわかる俺が目のおいてやらなあかん」って、そう言うたそうです。その後に書いてあったのが、「俺が上空で暴力、暴言は、一番振るってきた人間や。でも、そのことでやり直しをした回数、これも俺が一番や。だから、やり直しの力は誰よりもついている」って、そう言うたそうなんですね。

上空って、校則とかマニュアルとか規則とかつくっていないんです。校則が

あかんからつくっていないの、違うんです。260人、それぞれの違った特性を持った子どもたちがいる。この子どもたち全てが学校という場で安心して自分を出して、他者と学び合える、こんな空気をつくるために校則をつくるのであれば、260人、260通りの校則が必要なんですね。260通りの校則って、私ら、つくれる？無理。じゃ、やめよう。これだけなんです、理由は。でも、何の決め事もないけど、たった1つだけ、人が人と安心して学べる、この場をどんなことがあっても保障する。

例えば、地域の学校ってね、ランドセルをあけたらゴキブリがびゅんと飛び出す子がいます。親はいるけど家庭はない子どもも地域にはたくさんいます。夏休みは給食がないじゃないですか。学校には学童保育があって、お弁当を持ってけへんかったら、学童に来られないんです。その子ね、お米があれば白いご飯は炊飯器で炊けるんです。お米のある日はご飯を炊きます。お弁当のバックを洗って、炊き立てのご飯を入れるんです。でも、白いご飯だけでは、友達はいっぱいおかずがあるから、何か欲しいなと思って冷蔵庫を見ても何も入っていない。冷凍室をあけたら、塊の冷凍の肉があった。この冷凍の肉を、炊き立てのご飯の上に乗せたんです。それを学童へ持ってきて、じゃ、みんなお弁当を食べようというときに、朝炊き立てのご飯の上に冷凍のお肉を乗せると、お昼になったらほどよく解凍されている。血がたれのようにになっている。生肉です。それを、その子は食べるわけです。それを見た地域の指導員さんが、職員室に飛び込んでくるんです。その地域の指導員さんが言うてくれる言葉、この言葉に私たちは常に先生という商売を振り返るんですね。地域の指導員さんが言いに来てくれた時、たまたま私がおったんです。「校長先生、ごめん」って入ってきたんですね。どうしたって言うたら、「誰々に生肉を食べさせてしもうてん、ごめんな、もうちょっとはよ気がついてやったらよかった」と言うて入ってきたんですよ。私らやったら、「何でこの子が生肉を持ってきているの、親はどうなっているの」とか、「生肉なんか持ってきたらあかんやん」とか、何かそんな大人の正解みたいな、どこか、社会が決めている正解みたいなことをいっぱい言うんですよ。でも、その地域指導員さんは、ごめんなって入ってきた。「どうしよう」って言ってくれた。

そのときにいたのは校長の私と、保健室の養護教諭。映画の中で、私がAと大げんかして、Aが「死ね」って言って、私がじゃあね、さようならって校長室から出ていった場面、覚えておられますか？ あの時私はほんまにAとけんかしていたから、死ねと言われて、じゃあね、さようならって私はAを見捨てて出ていこうとしたときに、職員室へ丸聞こえですから、養護教諭の彼女が、私が出ていくときにもう入ってきているんです。すれ違うときに耳元で私に、「どっちもどっちやな」って、そう言って入ってきたんですね。これが職員です。大体こういう関係ですよ。この養護教諭と私と2人だけが職員室におった

んです。そこへ飛び込んできてくれたんです。「どうしよう」って言われたときに、養護教諭も私も同じことを言うたんです。「あっ、大丈夫」って。「それぐらいでどうってことない、免疫はついている。だからそれより、知らん顔をしておってやって。でも、そうっと思っていて。おトイレに行く回数が多いとか、何かふだんと違うことがあったら一緒に病院へ連れていこう」って。そう言うのと、「了解」って戻りました。子どもたちが帰った後、指導員さんたちがみんなでびゃーっと職員室のドアをあけて、一言も物を言わんと、オーケーとかやって帰ってくれたんですね。

これって、私たち、ものすごく学ばされる場所なんですよ。そういう人たちと一緒に子どもを目の前に置いている。先生たちだけが見ていたら、スーツケースの中にばんばんにはめ込みたくなる。地域の子は地域で育つというのは、ここやなと思うんですね。教員という一定の価値観で子どもを見ると、私らみたいにこんなええかげんな、正解なんかどこにもないよと言っている人間でも、子どもから見れば、「先生って正解を持っているよね、正解にはまれへんかったら自分は生きにくいよね」、みたいな空気をどこかに醸し出しているんですよ。でも、そこに、地域のおっちゃんやおばちゃんや、じいちゃんやばあちゃんや、兄ちゃん姉ちゃんがいつも授業の中にいたら、「あっ、こんな大人もこんな大人も、こんな価値観、あっ、俺、これでええわ、俺、頑張れるわ」って、1人の子の可能性って、自尊感情ってどんどん広がる。これが、10年先の多様な社会で生きて働く原動力をつくるには、学校が多様な空気であればあかな、ということなんですね。

だから、このたった1つの約束って、自分がされて嫌なことは人にしない、言わない。これだけなんです、大空は。あとは何の決まりも何もないんです。でも、ちょっと間違ったら水戸黄門の印籠になるんです。ほら、自分がされて嫌なことをやったやろう、アウトやろうって。そうではなくて、絶対守られへん約束やという想定でこの約束があるんです。校則というのは、絶対守らなアカンでという想定であるでしょう。でも、そうじゃなくて、自分がされて嫌なことを人にしない、言わないって、絶対人は守られへんって。守られへんけど、守られへんかったことに気づいたときには、やっぱり自分のためにやり直しをしようよ。このやり直しが、人をつくっていくと思うんですね。

だから、この約束を破ったときに、先生の説教も罰も何もあります。あるのは、自分のために、自分が友達に嫌なことをしたら、この嫌なことをしない自分になるまで、子どもは教室から机と椅子を持って職員室か校長室へ出てくるんです。で、自分の学ぶ場所を自分で決めるんです。決して、罰で出ておいでじゃないんですよ。この辺、紙一重なんですけどね。

例えば、大空は9年間、いろんな子どもが山ほどいましたが、いじめの事象

はないんです。大空の9年間で、全国から学校へ行かれへん子がいっぱいかわってくるんですけど、普通に來ているんです、学校に。世間で不登校とか言いますが、この言葉は行けていない子どもにとってとても失礼な言葉だと私は思っています。行けない原因はこの子が吸えない空気が学校にあるからです。どんな理由があっても、この子が吸える空気をつくれば、この子は行ける。ちょっときつい言い方になるかもわかりません。ところが、行けていない子はね、自分が悪い、そう思ってしまう。とんでもない。この子が吸える空気があったら行ける。その空気をみんなで作ればいいだけのことなんですね。この子が吸われへん空気を周りの子どもたちは吸っている、この子が吸える空気ができたら、周りの子どもたちはもっと学びやすくなるんですよ。だから、この子のためじゃなくて、全ての子どものためにつながる話なんですよ。

このたった1つの約束は、人が破るんや。破ったら、自分のためにやり直しをする。例えばね、報道で、いじめがあったような報道をされるじゃないですか。大空の中は見えないいじめがない、トラブルもない、そういうときに、この報道をね、みんなで学ぶんです。これって、みんなどう思う？ 自分がやってへんときは、子どもって、案外冷静に正解を言うんです。おもしろいですよ。私らは正解をよう言わん大人になっているんですけど、子どもって、「そんなの、いじめているやつが絶対悪いに決まっている」って、いじめそうなやつが言うんです。自分はいじめてへんから。えっ、この子が悪いのかと言ったら、「当たり前やん、こっちがこんなのをやるからや」。それなら、みんな、「おまえと一緒にや」とか言うんですよ、言うんですけど、わーっとそうやってしゃべるんですよ。でも、これってどうしたらいいやろう、大空のたった1つの約束って、こういうときはどんなふうに自分のために使えばいいんやろうみたいなことを、いつもみんなで、1年生から6年生まで全教職員、地域の人らも暇やたら來ている、大空で学んでいる全ての人が、自分たちが平和なときに、周りで起きたことを自分たちやったらどうするって考えるんです。

これって、皆さん、いいですよ。ぜひ使ってください。自分に非がないときは、子どもは格好ええことを言うんです。「いじめているやつが教室にいて、いじめられている子が学校に來られない、こんなおかしいことはない」って言うんです。どう思います？ 皆さん。そのとおりでしょう。みんな、納得。じゃ、どうするって言ったら、「いじめているやつが教室におらんといたらいい。そうしたら、いじめられているやつは安心して教室におれる」。全員、「そうや」って言うんですよ。じゃ、次、どうするのって言うたら、「いじめているやつは教室から出て、やり直しをすればいい」。どこで？ って聞いたら、「職員室か校長室」って言うんです。どっちって言うたら、「それは自分が決めたらいい」って。なるほど。じゃ、今度こんなことがあったらこうしようかって言うと、みんな、「そうしよう」と、こうやって終わるんですよ。

その後、Bがどついたんです。Bは自分から机と椅子を持って職員室に來て、

「何をしているの、あんた」って言うたら、「どこで勉強しようかな」って言いながら職員室と校長室の間ぐらいのところに机と椅子を置いて。実はBは最長で約1カ月近くそこで学んだんですね。あいつがそこにおるときに地域の人や……。あのね、大空では『保護者』って呼んでいないんです、保護者は家だけやろうって。保護者は自分の子だけやから、家だけでいい。「大空には260人子どもがいるから、今日から皆さんは大空のサポーターです」って入学式に必ず言います。今の校長も必ず言います。校長が変わったってどうってことがない。理念を通したら、同じことを言うていたら同じことだけですからね。だから、保護者は家だけ。皆さんは今日から260人の子どもたちのサポーターです。子どもたち、友達の母ちゃんを見たら「サポーター、サポーター、サポーター」って呼ぶんです。皆さん、学校へ行ってサポーターと言われたらその気になるでしょう。その気になるから、何かせなあかんと思うんですね。だから、大空には山ほど子どもたちのサポーターがいるんです。お手紙も全部、サポーターの皆さんって出すので。サポーターがしみ込むんですね。だから、サポーターは時間があれば、できるときにできる人が無理なく楽しく、これが合い言葉なんですね。

時間があったら、授業の中に入ってきます。ただ、暗黙の約束はね、自分の子どもは見るな、さわるな、聞くな。この理由は、嫌やろう、お母ちゃんがずっと横に。

フロア：嫌。

木村：

嫌やろう。だから、自分の子どもは見るな、聞くな。自分の子どもを育てたかったら、自分の子どもの周りの子どもを育てにおいでって。これは確信を持って、子どもが育ちます。自分の子どもにやったら、「あんた、何をしているの」って言うでしょう。でも、友達の子どもやったら、「大丈夫」とか言うんです、大人って不思議なことに。だから、自分の親には、「なあなあ、嫌やねん」って言われへんけど、大丈夫って言ってもらった友達のお母ちゃんには、「俺、校長が嫌やねん」とか言えるわけですよ。その声を職員室に放り込んでくれるから、私たちは自分たちのできることが考えられる。

これが実は、子どもの周りの大人のチームなんです。特別に専門家が来たら子どもたちが幸せになんてなかなか難しい。でも、いつも子どもたちの前にいる地域の人と、私たちも学校で働いている一瞬地域の人間ですよ。この多種多様な人が、いつも子どもの周りで、おい、行けるか、大丈夫かって、1人でも多く子どもの周りにいてくれる、これが地域なんですね。

だから、大空っていつもいろんな人が授業に勝手に入ってきます。誰かが入ってきてくれたら、先生、授業者は、ラッキーと思います。当然最初はね、「私

の授業を見ないでよ」。学校って人を入れたがらない。それは、食わず嫌いなんです。誰かが学校に来たら文句を言われると思うんです。でもね、「困っている子どもを探しに学校へおいでな」「自分の子どもを育てたかったら、自分の子どもの周りの子どもを育てにおいでな」って、これってね、みんなが育つんですよ。この先生の授業がうまいとか下手やとか、校長、ここはごみがいっぱいやで掃除できてへんどか、こんな人は出入り禁止。だって、授業がうまいとか下手やとか、しょせん知れた人間が先生をしているわけですからね。だから、大空の教員に一番必要な力は1つやって言い続けています。それは、いい授業をするとか、いい学級経営をするとか、子ども理解をするとか、これは過去の教員の力です。いい授業をしようと思うと、先生の指示を聞かない子どもは邪魔になります。私はこれを、1970年に教えてもらったんですよ。幸せな人間やと思うんですけどね。だから、そうじゃないんです。主語は子どもなんです。主語を子どもに変える。子どもが安心して学んでいる、子どもがいきめてんねん、子どもがいきめられてんねん、子どもが笑ってんねん、子どもが来られへんねん。主語を子どもに変えたら、私たち何をしたらいいんやろうというところはおのずと、みんなでやらへんかったらその子の困り感は保障できひんのです。これが、チームです。一人の子どもを360度から見て。例えば30人教職員がいたら、目の前に担任の先生がいてるけど、どうもちょっと言いにくいと思ったら、子どもが選んだらいいんですよ。校長室に来て、「校長先生、俺は困っている」と。「私に言いこんと何で校長に言いに行くのよ」って、こんなふうに思っている担任は、自分を変えるかやめるかどっちかですよ。子どもにとって邪魔です。この辺り、私たちは毅然と、自分たち同士で自浄作用を高めてきました。

だから、「みんなの学校」の映画の中で、校長がパワハラをしている場面があったでしょう。首やとか言っていたでしょう。あんなの、校長をしていたら言えません。私は学校の中で、校長をしているという時間は、実は一秒も持ちませんでした。校長の責任って、全ての子が安心して学ぶ事実をつくることなんです。育てているで終わるのと違うって。事実をつくる、この責任は校長にしかない。これだけなんです。そうすると、自分の仕事はリーダーシップをとることではなくて、子どもと子どもをつなぐ、子どもと大人をつなぐ、大人と大人をつなぐコーディネーターに徹することやなど。自分がコーディネーターに徹していたら、あっ、あれはええなと思ったら地域の人たちがみんなコーディネーターに徹してくれるんですね。

大空では、どんなトラブルがあっても必ずそのトラブルを、「いじめたやろう、罰や、謝れ」なんかじゃなくて、「何でたたいたの、たたく理由は何やったの」、「あっ、そうなの」、「こう言っているで」、「あっ、そうなの、こう言っているで」って。コーディネーターというのは通訳ですよ。そうしている間に、当事者の子ども同士はなぜか納得します。納得して家に帰ればモンスターは出ま

せん。子どもが納得しているから。納得するというのは、自分に返しています。納得って大事です。毎日納得しないで家に帰るといのは、それこそそこが「私たちの力のなさやな」って言っていました。だから、全ての子が納得して帰れる。ここだけなんです。子ども同士がつながっていると、不登校やいじめって必然的に起きません。

だから、さっきのBみたいに、机と椅子を持ってくるわけですよ。あんた、まだおるの？って、もう、私らがお菓子を食べている横におるわけですよ。これって邪魔ですよ。だから、みんな、「B、いつまでおるの、もう、あんた、はよ帰りや」って、先生たち、職員も、「もう、あんた、はよ向こうへ行って、もう邪魔やわ」って平気で言うんですよ。でもね、「まだ、まだ」、Bは真剣なんです。なぜかという、人を叩きたくないんです。叩きたくないけど、ずっと叩いているから、叩けへんという自信が本人にないんです。

「暴力はあかん、絶対暴力を振るったらあかんで」、みたいな正解を学校がBに押しつけたらね、Bを産んでくれて育ててくれた母の営みを総否定することになるんですよ、私たちが。「暴力はあかん、暴力を振るう人間は人ではないんや」なんて言ったら、自分の母親はアウトやって思うじゃないですか。私たちの、この指導という言葉はいつでも暴力という言葉に変わりますからね。こんな大それたこと、私たちにはできひん。でも、自分がされて嫌なことはやめておこう、これは相手にとってと違うで、自分にとってもものすごい得なことやで、という視点で、どれだけ時間がかかっても、やり直しを常に何よりも優先して、大人が横に、透明人間のようにひよっとおったんですね。

だから、Bは1カ月居座りました。1カ月たって、「もう、あんた、強制退去な。申し訳ないけど、1カ月以上はちょっとおつてもうたら困るわ」って言うたんですね。下手をしたら、職員室におるほうがBにとっては楽なんです。叩く理由が生まれなから。それに気づいた私らは、あつ、これはあかんと思って、教室に行って、「なあ、Bが邪魔やねん、みんな、連れてきて」って。「おう」って言いながら子どもらが、「おう、帰ってこい」とか言うて、もう強制的に教室に帰ったんですけど。

こいつは悪いでって思われている子って、ほとんどが悪いことをしたくないと思っていると思うんですね。悪いことをしたくないと思ってんねんけど、気がついたらやってしまっている。そんな自分にもものすごい不安になる。やりたくない、やりたくない、叩きたくないって思えば思うほど、みんなの教室に帰るのが不安なんですね。

Bは強制撤去されたときにね、校長室にふらっと来て、「先生、俺、次な、どついたら、どうしたらいい」って聞いたんですね。私、ええかげんな人間。「いや、そのときに相談しようや」って言うたんです。「えー」って言いながら教室に帰りましたが、ここから彼は一度も手を出していません。中学の3年間

いろんなことがあっても、一切暴力、暴言はやめたそうです。母の手紙には、「先生、私もBと一緒に、やり直しができました」と書いてありました。一度もBに手を挙げていないし、暴言も控えたって書いてありました。

このBが、自分がやり直しをしているときに言ってもらっていた言葉を、教師になって、そういうやつらに言ってやりたいと。この言葉が、大空の大人たちに言われたことなんです。この大人というのは、もちろん教職員もあるし、地域の人もあるし、自分の母以外の周りの母ちゃんたちや父ちゃんたちや、じいちゃんたちやばあちゃんたちや、このみんなを子どもたちは大空の大人たちって呼ぶんです。職員室には、いつも大空の大人たちが、なぜか、いる。子どものことで何かがあったら職員室に放り込むからです。Bは職員室にずっと居座っていたから、きっと誰よりもたくさん大空の大人たちに声をかけられている。「この大空の大人たちが、みんな俺と一緒にのことを言うてくれた」って言うたんですって。私はそれを卒業して3年目に聞いてめちゃくちゃ驚いたんですけど、みんな同じことを言っていたんやと思って。どんなことをみんながBに言っていたかという、「B、あんたはええ子なんやで。Bはいい子なんやで。Bのやっていることがあかんねんで。あんたのやっていることを変えるんやで」って、「あんたはいい子や」って、みんながそれを言うてくれていた。だから、自分はそうやって言うてやれる、そのために教師になりたいって、めちゃくちゃ受験勉強しているそうです。今、中学3年生。本当になるか、なれへんか、そんな、知ったことやありません。突然違う仕事に行こうと、一瞬一瞬ですから。今、彼がそう思ったということがとても貴重じゃないですか。明日の彼がまた違うことを感じたら、それが進化ですよ。

えっ、先生、ずっとしゃべっていますが、もうかなりの時間で、一回終わらなあきませんね。ですね。1時間ほどで皆さん、質疑応答をとか言っていたのに、みんなが聞いてくれるからしゃべるんですよね。あの、済みません、まとまった話が全然できないんですが、映画を見ていただいたり聞いていただいたり、ここのところをまだ言うてへんとか、ここを聞きたいとか、ここが途中で終わっているよとか、そういうことをどんどん質問してください。お願いします。

司会（石田）：

どうもありがとうございました。（拍手）

この時間は45分までとってあります。先生にお聞きしたいことがたくさんあると思いますが、どなたからでも結構ですので、手を挙げてくださったら係の者がマイクを持って行きます。

フロアより：

今、全校36人のちっちゃい学校で、地域の人もしんとうに子どもたちを見つめて、教職員も全員の子どもの顔も名前も全てわかって、子どもたちは自己存在感ですか、それもすごく高くて、先生がおっしゃった、子どもが自分を大事にするところが大事というところが私の学校でも同じことが言えるんだなと感じました。

前、勤めていた学校は都会の学校で、しんとうにいろいろなタイプの、しんとうに大空さんと同じような、いろんなタイプの子がいる学校で、特別支援のコーディネーターをやっていました。そこで一番苦しいのが、学校の中で限られた人、人材、つまり教職員の数で、どれだけ通常学級の中にいる障がいを抱えた子どもたちを支えていくかというのはすごく苦しみました。その学校の場合はやっぱり特別支援学級を設置して、お母様方の要望に応える形で子どもたちの支援の仕方を考えていったんです。でも、大空さんは、もう最初から特別支援学級が、おそらく多分、なかったのかなと思うんですけど、校長としてどうやって限られた職員で子どもたちのサポートをしていくと考えていかれたのか。また、特別支援学級をつくるということは考えなかったのかということも聞かせていただきたいです。

木村：

とてもありがたい、いい質問ですね。ありがとうございます。

最初、開校したときは、特別支援学級って、あゆみ学級かな、そういう教室が大空にはつくられていました。大空の開校というのは、実は、とてもアウェーからの開校だったので、大きい学校があって分離独立しようというのに、新しく大空ができるこの地域に建つ学校を、大きい学校の人たちがみんな反対したんですね。それは、地域格差を持っていたからです。大きい学校の地域はいい地域、大空の建物が建つ地域は俺らの地域よりも格下の地域。その格下の地域に何で俺らが行かなあかんねんって20年間反対運動をしてはったんですね。だから、分校にして、新しくできたところは5、6年だけ。もともとの大きい学校は1年から4年で、分校制度にして、この3年目に私は大きい学校の校長で行ったんですね。

そこで見たのは、自分の子どもじゃない障がいのある子どもを見る大人の目、もう邪魔でしかないんですね。もっと言えば、うちの子でなくてよかった。要するに、排除ですね。この、大人が人を排除して、差別をしている。この空気を20年間、若い母ちゃんや子どもたちはシャワーのように吸ってきた。これが、実は大空の、みんなの学校の地域やったんです。皆さん、どんなふうに見られたかわからないんですが、いい地域やからみんなの学校ができるとか、たくさん支援担当がいるからこんな子らがとっても行けるんやとか、とんでもありません。全くアウェーからのスタートでした。

そこで考えたのはね、くぐりに子どもをはめ込む、くぐりで物を見る、これぐらい学びの場に邪魔なものはないと思ったんです。例えば、皆さん、障がい児ってよく言葉で使うと思いますが、障がい児と言われる人間はこの世の中に存在しない。障がいのある子ども、この子どもはいます。でも、障がい児って言われる子どもは存在しない。皆さん、ご自分のことを健常児って言いますか？ 健常者って言いますか？ でも、障がいのある人を障がい者って呼ぶでしょう。障がい者差別何とか法ってポスターもできるじゃないですか。これって、とても目に見えない、自分の中にある大きな差別やと思うんですね。

開校当初は、インクルーシブとか特別支援教育とか、分けるとか分けへんとかみんな一緒とか、実は、こういうことはただの一度もしゃべったこともなければ、口に出したこともない、大空なんです。だから、今、先生、すごいいい質問をしてもらってんだけど、支援担当の先生が、例えば、9年目は260人子どもがいました。この260人の中に、重度の知的発達障害があるよって診断されている子が52人いたんです。結構なバランスでしょう。今は三百何人になって、60人ぐらいいてるのと違うかな。今、何か、とても間違っただ日本社会やと思います。行かれへんようになったら、みんな大空に行くんです。「みんなの学校」を見て、ああ、あれやったら行けるって、みんな引っ越しをするんです。愛知県からも引っ越ししてきました。これって大間違いです。大空に逃げていったら幸せになるなんて、とんでもないじゃないですか。大空の地域だけが豊かになっても、子どもが活躍する社会のほんの1点ですよ。やっぱり全国の地域のパブリックですからね。パブリックの学校って、みんなの学校ですよ。だから、全国の地域の学校が、全ての子が安心して学ぶ、その場をね、その子どもらの周りにいる大人が自分らでつくる、これが当たり前やと思うんですね。だから、満員御礼の旗をずーっと出しているんですけど、引っ越ししてきて大空の地域に住所があれば当然通うじゃないですか。これは、一切お勧めしていませんので、今の大空の人たちが、「木村、黙れ」とか言って、怒っているんですよ。「木村が喋れば、大空に行ったらいいみたいだね、間違っただ感覚を持ってどんどん引っ越しをしてくる」とかって言うんですけど、これはやっぱり1つの学校だけの話ではありません。社会が変わらないと。

だから、大空のスタートは、実はそんな、大人が子どもたちの敵なのかというようなところのスタートやったんですね。大阪市ってね、人権教育は大きな看板を下げている市なんです。同和教育といってね、江戸時代の穢多・非人という流れから、部落の人たちは人間じゃないよみたいな言われなき差別、この差別を絶対なくしていこうぜって全国でも一番に教育の根幹においてやってきたのが、実は大阪市です。

ところがね、大人ってね、差別をしたらあかんねん、こんなことを言うたらあかんと、いうことは知っているんです。自分の心の中では、差別はどれだけ人の命を奪うものやって。自分がもしそうやったら、自分がその立場やったら

どうやねんって考えたら、人ってかろうじて想像力って湧くと思うんですけど、やっぱり他人事なんですね。

実は、大空の大きい学校が隣の学校へ行きたないというのは、大空の直接の校区ではないんですよ、大空のある地域名、この地域に被差別部落を含む。ただこれだけです。でも、部落があるから行きたくないとは口が裂けても言ってはいけないということを、大人たちは知っているんです。知っているから水面下で、見えないところでその差別をずーっと温存していくんですね。まあ、これは大阪市だけじゃなく、全国どこでも、大人の社会では一緒かもわからないんですけど、実は、これが大空のスタートやったんです。

だから、大空は、みんな行ったらあかん、20年、あっちの学校には行きませんって署名を集められていた学校でした。それが、みんなの学校なんですよ。だから、大空をつくっているみんなはね、「大空でみんなの学校ができたら全国なんかあつという間にみんなの学校ができるやんな」って、心底思っているんですよ。だから、必要やと思ったらすぐできるの。できひんというのは、あんな校長はおれへんとかね、あんな職員はおれへんとかね、人がたくさんおったけど手が足らんとかね、それは言いわけやと思います。必要やったらやるしかない。必要と思ったらどんな手段でもとれる。大空は、必要と思ったんです。

260人の中に50人にいてということは、とても大きなバランスです。それも、椅子に座るなんてことは到底できない子、いっぱいいます。1年生だったらびゅーっとそこら中走っています。走って行って、先生が追いかけていったら授業ができひんじゃないですか。でも、そこに山ほど手がいるんです。でも、大阪市の教育委員会に、1人子どもが入ってきたから加配頂戴なんて言って、くれるわけがない。だから、ただの一度も要求しませんでした。開校した当初は、ダウン症のFという男の子がたった1人やったんです。このF1人でスタートするはずだったんですが、始業式の日、突然ね、何が重度かわかりませんけど、とても重度な知的障害自閉症スペクトラムという診断をされた2人の男の子が、突然入ってきました。これが大空のスタートやったんです。1人の子は、2週間しか小学校に行けず、2週間で義務教育を奪われた。そこから、母親が裁判をして、障がい児をめぐる大阪市の大きな裁判継続中の子どもが、指定外就学ということで来ました。Gという子ですね。この子の話も、皆さん、5時間あったらいっぱい話せるんですが。

やっぱり、私らがマニュアルで、これが大事、こんな学校をつくろうと言ってつくったのでは一切ないんです。目の前の子どもだけを見ていようなんて。何か、こう言うと、皆さん、全然まとまりがない、訳のわからん話やなと思いはると思うんですけど、何もないんですよ。目の前の子どもが安心して、これだけを見ようなんて、これしかなかったの、その結果がみんなの学校の姿なんですね。だから、この突然入ってきた子どもから学んだことが、実はスタートでした。だから、加配なんて一人もありません。突然かわってきた子は

子どもしか来えへん。年度途中にその子が来ても、そんなの、誰も入らない。

そうやっている間にね、そんなの要らんと思ったんです。何か、「うちの学校はこれだけ障がいのある子どもが来て大変なんですよ、人を下さいよ」って言っている間はあかんと思いました。この地域に生きている、これだけの子どもたちに関わるのは学校の私らだけと違うやろう。だって、この子どもらって地域の宝ですよ。私らは、何年間かいたら転勤するじゃないですか。そこの学校の風。でも、子どもたちはずっとその地域に根づいて、地域をつくる大人に成長していくわけですね。ということは、地域住民なんて山ほどいます。この山ほどいる地域住民が、地域の宝が学んでいる学校を、対等に学校とともにつくる。これは当たり前やろうって、実は、ここからスタートしたんですね。

ここからスタートしたら、子どもを監禁せんでええんです。教室に吸う空気がないから、子どもは出ていきます。教室にこの子が安心して吸える空気を、木村という教員が授業の中でようつくらん。だから、苦しくなるから出ていくんです。出ていった子に、「何しているの、教室に座っているのが当たり前でしょう、みんな座っているでしょう、あんただけ出ていったらあかんでしょう」みたいなこと、過去の私たちは言っていたのでよくわかるんですね。帰ってきなさいって無理やり連れに行こうなんて思うと、「帰っておいで」言う先生の手をかむ。教室からも出るし、対教師暴力も振るう。まだ先生やったらましやけど、先生って、近所の子に、「あの子が出ていったら迎えに行って、連れて帰ってきて」って気軽に言うんです。そうしたら、頼まれた子は使命を果たさなあかんじゃないですか。うんって、その子が逃げていったのをぶわーっと追いかけて行って、帰っておいでって手をつかんで連れて帰る。教室に入るのが苦しいから出ているんですよ。サボって出ているのは大人なんですわ。大人と子どもは違う。でも、自分にしか視点を当てられへんから、子どもがサボって出たと思うんですね。「自分が空気をつくれへんかった、ごめんな」と思ったら、子どもは安心して帰ってきます。でも、「自分の空気を吸ってへん、何やのあんたは」って、子どもに。困っているのは子どもやねんけど、困っているのは先生や。これ、先生が主語なんです。だから、主語を子どもに変えたら全てオールオーケーなんですね。

子どもがそうやって出ていく、友達が捕まえに行く、帰っておいでって言ったら手をかむ。どうなりますか。親切な友達の手をこの子はかんだんです。この子の親は呼び出されて、あそこの家に謝りに行ってください。その子は、自分をもっと苦しい立場に追いやる存在に、ごめんなさいって謝られるんですよ。

何か、こういうことが日常茶飯事に起きていると、この当事者2人だけじゃなくて、ここにいる周りの子どもたちが、この2人を指導している先生から学ぶものは何かと言うと、「教室から出ていったあの子は、友達の手までかんだものすごい悪い子なんやねん、あの子は障がいがあるねん、障がい児やねん」。

こういうことで、周りの子どもたちが大きな力を失うんですね。冷静に考えたら、迎えに来てくれた子の手をかませたのは誰よというたら、教師じゃないですか。そうでしょう、皆さん。先生が、「あんた、迎えに行行ってやって」と言えへんかったら、かまれへんわけじゃないですか。でも、迎えに行行ってやってと言うて帰ってくるやろうと思っているというのは、その子がなぜ出ていったかということを想像できていない1人の教師がいるということなんですね。

だから、1人の子をみんなで見ようぜと言っているだけで、障がいがある子はこっちの部屋ねという発想は、実はただの一度も出なかったんです。おそらく先生がお聞きになりたいのは、例えば、教室の中に重度の知的障害の子がいる。この重度の知的障害の子が、みんなと一緒に教室の中において、どんな力をつけられるのやろうって、そんなふうに思われるでしょう？ 私ら、大空なんて、全くど素人の集まりです。私なんか体育だけしか知らん人間で、『特別支援教育』の『と』もわかれへんのですよ。

でも、最初に、子どもたち同士の関係性をつなぐ、これが私らの最終目的やろう、そう考えたときに、障がいを理由に子ども同士の関係性を分断する。そこで、障がいがある子が得る力はもしかしたら、一部分あるかもしれない。でも、「障がいがあるからあんたは算数の時間はこっちやで」って、これって障がいというくくりで子どもの学びを分断することじゃないですか。障がいがあるから算数と国語だけ違う部屋で勉強しますという、この制度の中に子どもが失う力。例えば、重度の知的障害の子がこっちの部屋で、この子が将来自立して社会で生きるために必要な力を手厚く保障しますよというのが、特別支援学級での学び。でも、私たち素人が、この知的障害ある子が将来自立するためにどんな力をつけられますか。将来、親と離れて地域で暮らせばいいわけですよ。施設に行かなくても。将来、地域で人とともに生きていく力って、いつもみんなと一緒にいるからこそ吸収できるものであって、私ら、何を与えたらええのやろう。

例えば、映画に出ていた、修学旅行で「手洗い」と言うのに洗わなかったH。このHが、教室におるだけでは何の力もつけへんのと違うかって、私、すごい悩みました。1年目、2年目、とっても大きく悩んだんですね。あるとき、先生たちがみんな不安になったんです。教室におるだけでええのかなって。だから、そんなときにやっぱりHは違う部屋で、Hに必要な力をつけようって。Hは、「あーっ」と声は出ますが、言葉が出ない。だから、みんなで考えて、素人がわからんようなことで、いっぱいHにかかわるんですけど、Hの顔は暗くなるだけなんです。Hは、自分からみんなのところに帰りたいって言えないので、「H、おいで」って言うたらついてくるから。Iみたいな子は、おいでって言うても嫌って言います。嫌と言うから、来ない。でも、Hは「おいで」って言うたら来るんです。だから、とても悩みました。

そうなったときに、私は母にいっぱい教えてもらったんですね。「母ちゃん、

この状態でHさー、将来、力がつくか？」って言うたら、母は、ちゃんと教えてくれました。「先生、この子が教室にみんなと一緒にいて、居心地が悪かったらあの子はふらっと出ていきます。こうやってみんなと一緒にいる。周りの子の言葉、動き、これが四六時中うちのHの体に入る、これほど大きな学力はない。願ってでもここに置いておいてほしい」って母は言いました。その言葉を聞いたときに、私、みんなにね、「なあなあ、Hが教室におる、それだけでいい、何もせんていい、要らんことをせんでおこう」って。そうやって言うた日のことを覚えております。

それから、発達障害というレッテルをいっぱい張られた子が大空にかわってくるけど、その子どもよりももっと暴れたやつがおるんですね。Jというやつが。この子が、この映画が公開されたとき、校長室に、「先生、俺、この映画は大反対や」って言いに来たんですね。「理由は」って言うたら、「俺が一秒も映ってへん」。「いや、それは映ってへん、いっぱいおるで」って言うたら、「カメラはずーっと俺の前にいた。誰よりも俺が一番カメラにも映されていた。それなのに俺の姿が一秒もない、監督に電話せえ」って言うから、わかったって監督に電話して、「Jが怒っている。映っていない理由を聞かせと言っているので、かわるね」って言うたら、Kという監督が耳元で、「校長先生、ほんまのことを言うていいんですか」って言うから、「うそは言えんやろう」ってかわったんですね。そうしたら、Jが、「俺がええ言うたらええねん」、そればかり言うているんですよ。「俺がええ言うたらええねん。次、映すときは俺を映してや」。これで電話を終わっていたんですけどね。監督が何て言うたのって聞いたら、「俺の姿をテレビで流したら放送コードにひっかかるって」。それぐらい暴れたやつなんです。もう暴れて暴れて。教室でみんなと一緒に授業が始まって、ちょっと頭の中が混線してきて、みんながわかるのに自分がわからないとなったら、うわーっと暴れるんですね。もしかしたら、この子は暴れるから、この子にとって安心できる場所を見つけてあげようって、「J、こっちへおいでって、J、ここやったら1人で同じことを学べるやろう、みんながおれへんかったら集中できるやろう」ってやる学校は、もしかしたらたくさんあるかもわかれへん。でも、大空で学んだことは、そうやってみんなの中から外して、安心して静寂した時間を持たすのであれば、Jには一生空気清浄機つきのカプセルが必要になるんですよ。だって、柔軟な、何とでも変えられる小学校時代にそうやって別世界を与えられたら、中学も、そこから後も、社会に出て、ずっと自分の落ちついた場所がなければ周りとともに生きていけない。こんなの、おかしいやろう。

だから、Jが暴れれば暴れるほど、実は、周りの子どもたちが育ちました。Jが暴れ始めるなと思ったらね、みんな、授業中でも、机を持ってばーっとJから離れるんです。一見、何、あんたら、嫌なことをしているのと思うんですよ。

「何してるの、あんたら」って言うと、子どもら「Jが暴れて飛んできたもので誰かがけがをしたら、余計Jがかわいそうやろう」って言うんです。だから、Jが暴れている間、周りはみんな誰ひとり横を向かず集中して、授業をしています。それは、そうすることがJが一番楽になることやと知っているからです。これが、周りが育つということです。「Jが暴れるから授業がおくれる」とか、「Jが暴れるから集中できひん」なんて一人も言いません。言いませんというより、そんなね、周りの子が立ち歩くから、周りの子が大きい声を出すから勉強できひんねんみたいな、そんな生っちょろい学び方をしたいか。社会に出たら、いっぱい騒々しい中で生きていくわけですよ。そうなったときに、小学校時代が社会の体験でなければどうやって通用するの。「Hが声を出しているから、俺、集中できひんねん」なんて、誰ひとり人のせいにする学びはしなくなります。そう考えたときに、みんなに迷惑をかけるからこの子を別の部屋に、という隠れた理由であれば、みんなが迷惑がかからない力をつければ、この子はみんなと一緒にいても何の問題もない。

次の問題として、みんなと一緒にいてこの障がいのある子の力が高まらないという理由で違う部屋に行く。それには、必要なときに幾らでも行けばいい。算数の時間、障がいがある人はこちらです。障がいというくくりを理由に、子ども同士の学びとかを分断する、これは、障がいのある子どもが失う力の何倍も、その周りの子どもたちが力を失っています。

これはね、全然気づかなかったんですけど、5年前、あのFたちが中学校へ行って、中学生になった1年生のときに、子どもらがみんな暗い顔をして帰ってきたんですね。大きな学校からどっと来て、大空、ちっちゃいところから行く。ここで一緒のクラスになるんですね。どうしたのって言うたら、周りから来た友達らが、Hがずっと教室におることを、「何でこいつら、教室におるねん、邪魔や。こいつはずっと声を出している、こいつはずっと動いているやろう。こんなやつがおったら集中して勉強できん、邪魔やろう」って大空の子どもたちにもものすごい怒ったそうです。これ、子どもたちが悪いんじゃないんですよ。当たり前の経験値の違いだけです。大空の子はその友達にね、「何でそんな言うの？」って聞いたんですって。そうしたら、「こいつらは俺らとは別格のやつや、こいつらは給食時間は一緒におるけど、それ以外は違う部屋で勉強しておるの」。とてもひどい言葉をそこで言っていましたね。「何とか児や」ってね。「こんなやつらは生きている意味があるのか」って、そういうことを周りの学校から来た子が言った。

皆さん、これを聞かれて、何という子や、何という家庭や、何という学校やって思わないでくださいね。こんな発想になっている子どもは、ただただその柔軟な幼稚園から中学生になる6年間、果敢に発達する柔らかい体の中に、障がいがあるというくくりで別の部屋ですという、この当たり前がそう発展させて

いるだけやと思うんですね。

大空は、障がいという言葉はただの一度も使ったことがないんです。だから、Hは、「あー」で表現する。言葉で表現しない。これだけなんです。Hは、疲れたら椅子に座る。やる気になったら椅子を立つ。これだけなんです。この一人一人の違いをずっと一緒におるから肌でわかる、それだけなんです。

これを言いに戻ってきた子どもたちは、F、Hがかわいそうなんて誰ひとり思っていない。もしかして私に、中学校へ何か言いに行きや、あっちの小学校へ何か言いに行きや、ということの言いに来たのかなってちょっと思ったんです。「なあなあ、私らに何を求めて来た」って言ったらね、子どもら、みんな同じことを言いました。「そんなふうにはしかFやHのことを思えないあの子らってさあ、不幸やろう」って言ったんですよ。「それって、どうしたらいい」って。これが相談やったんです。

ここは、やっぱり当たり前の違いで、学校は、差別してやろうとかなんとか、そんな、一個も思っていないんですよ。この子のためにこうせなあかん、こうせなあかん、そう思っているんですよ。思えば思うほど人が欲しくなるんですよ。思えば思うほど人が足りなくなるんです。でもね、子どもたちに、例えば、発達障害であろうと重度の知的障害であろうと、障がいのある子どもに一番必要な支援者は私たち教員ではなくて、その子の周りにいる友達、周りの子どもたちです。だから、大空ではね、私らは専門家でも何でもないので偉そうなことは言えません、事実しか私は伝えられないんですが、障がいて病気じゃないから、病気じゃないでしょ？ 生まれてきた自分がその障がいがあって生まれてきているだけですよ。だから、障がいは病気じゃない、イコール、治すものではないんですよ。どこかに、健常と言われる人にちょっとでも近づけるためにこの子に手厚い指導を、みたいに間違っていた自分がいました。でも、そうじゃなくて、障がいは治すものではない。健常と言われる人に近づけるなんて、これこそ人権侵害ですよ。そんな大人の勝手な思い込みは間違っているなって、大空で気づきました。

じゃ、障がいは何やねんって考えたら、その子の持っている特性、その子らしさ。もっとべたな言葉で言えば、その子の個性ですよ。じゃ、私たち大人は、1人の子どもの個性をどれだけ伸ばすか。この子の個性とあの子の個性と違うわけですよ。「みんな、正解はここやで」って伸ばしたら、これは、洗脳です。この子はこの子の個性をどう伸ばすか、彼女は彼女の個性をどう伸ばすか、これが、子どもが伸ばす学力であって、私たちはそれをしっかりと支える専門性があるわけですよ。

そうなったときに、障がいを個性と考えたら、個性は伸ばす、じゃ、障がいを長所に変える、これが私らの仕事やなって気づいたんです。ダウン症であればダウン症を長所に変える、重度の知的障害と診断されている子は、この重度

の知的障害というこの子の個性をどれだけ長所に変えるか。障がいはいあかんねん、隠さなあかんねん、治さなあかんねんと思っているから、その子がその子らしく生きられないわけで、じゃ、障がいを長所に変える、このための手段。大空では、私たちは1個しか見つけられませんでした。きっとね、いっぱいあると思います。でも、私たちは1個しか見つけられなかったんですね。それは、その障がいがあると言われる子の、周りの子どもたちをどれだけ育てるかです。周りの子どもたちが力をつければ力をつけるほど、障がいがあると言われる子どもは存分に障がいを前面に出して、自分らしく生きていける。何か、それを、子どもたちが教えてくれたかな。

だから、「先生が何とかしてやらなあかん」って思っている間は、1人でもややこしいのがおったら来んほうがええと思うんですよ。でも、私らよりも子ども同士の関係性をつなぐ。全国学力調査の平均正答率を上げることが学校の目的ではありませんよね。これが目的やと、低学力の子を全部特別支援学級に放り出しているんですよ。試験を受けなくてもいいみたいな。でも、こんなのはほんの一握りの力であって、子どもが安心して地域の学校で学び合っていたら、結果として目に見える学力は勝手に上がるんですね。大空の周りの子どもたちの学力、ひっくり返るくらい高かったんです。最初はめっちゃ低かったんです。9年目って、全国学力調査の結果、秋田県が1位、B問題なんて秋田県よりも8ポイント上やったんです。ひっくり返るでしょう。それは、私たちが教えていないからです。あっ、笑っていただいたらほっとしましたけど。

子どもたち同士が安心して学んでいるから、わかれへんって言えるんですよ。大空に帰ってきた先生が、カルチャーショックになって、「わからなくなりました」。何がって聞いたら、「わかれへんって言う子をつくったらあかんって、今までわからせようとしてきたけど、大空に来たら、子どもが何でわかれへんって言わんねん、わかれへんって言える子どもを育てるのがあんたの仕事やろうって言われて、私はどうしていいかわかりません」って、大体この辺でみんな悩み始めるんですけどね。でも、わかれへん、おお、わかれへんのか、教えてやるわ、あっ、あかん、俺もわかれへんわ、いや、もう一回教えてよ、何とかかんとかって、わかれへんというつながりが、見える学力も高めるんですね。

だから、安心して学べる居場所をつくる、そのためにはみんなの学校って、必要やったらすぐできる。教育委員会や学校に求めることではないからです。地域のものですから、地域住民が学校や先生を見ないで、今困っている子は誰や、一番困っている子の横に透明人間のようにそっといる。そうしたら、子どもがひとりぼっちにならない。ひとりぼっちになれへんかったら死にません。どれだけ手厚くしていても、ひとりぼっちになるから自分をなくします。やっぱり、子どもは絶対自ら死なしたらあかんわけじゃないですか。大人に必要な

のは、ひとりぼっちの子どもをつくらない。

やっぱり、見えるところはね、放っておっても見えるんです。大人が見なあかんのは、見えへんところなんですよ。例えば自分がね、暗いところにいてるって想像してください。暗い、真っ暗な中にいたら、見たなかっても明るいところって勝手に見えるでしょう。でも、自分が明るいところにいたら、どれだけ首を回していても暗いところなんて見えへんでしょう、真っ暗やから。でも、いつも暗いところはどこにあるのやろうなって思っているとね、暗いところを見ようとする自分になるんですよ。子どもって、見えているところはいいんです。見えていないところをどうやってのぞこうかなって、こんな大人に子どもは絶対、「なあなあ」って。困ったら、斜めの関係で、地域のおっちゃん、おばちゃんなんてめっちゃ泣いて、それがみんなの学校。

いやん。(フロアから笑い)

:

司会(石田):ありがとうございました。

木村:

済みません。

:

司会(石田):ご質問いただいた方はお一人でしたけれども、多分、お答えは30人ぐらいに対するお答えになっていたと思います。どうもありがとうございました。

木村:

ありがとうございました。(拍手)

:

どうかもう一度大きな拍手を。(拍手)

(反訳終了)